

5段落エッセイ

現在、私は INFOE 代表の松本先生が教えていらっしゃる「Academic Skills for Study Abroad」という早稲田大学のクラスを受講しています。このクラスでは、留学先の大学で課されるペーパーやライティングに対して、相手が求める答えに正確に答えられるような訓練をしています。

正確に答えるためには、まずは形から学ばないといけませんでした。それが5段落エッセイです。5段落エッセイでは、自分の主張を提案し、それをサポートする理由や事例を挙げて、最後に主張のまとめをする、というものです。欧米ではこの書き方が小学校のときから訓練されて、この型がエッセイを書くときのスタンダードであると学びました。

私は海外で教育を受けた経験がありません。ですからこれまで、英語で文章を書くときがあっても、すべて「起承転結」や「序論・本論・結論」といわれる日本式の方法で書いていました。高校や大学のレポートを書くときはこれで許されていたのですが、私が一番困ったのは留学するために必要になった TOEFL を受けたときです。リーディングや文法はほぼ満点でしたし、リスニングもなんとかがんばったのですが、ライティングの点数だけがどうしても伸びませんでした。結局、6点満点中3点から3.5点しか取れず、合計のスコアも伸び悩んでしまいました。

5段落エッセイの書き方を学んだ今、TOEFL のスコアがどのようになるかはわかりません。しかし、松本先生の授業を受けて確実に変わったことは、物事に対する見方、考え方です。5段落エッセイの書き方の雛形は、モデルを見れば理解することができます。しかしその書き方を学んだとしても、そこで書く内容がなければ宝の持ち腐れです。そこで書き方以上に大切なスキルとして、考えるということが絶対に必要なのです。考えることができなければ、それを書いて表現することもできないのです。

日本の教育では、概して、あらかじめ決められた答えを探す勉強をし、みんなと同じ考えになるように教育されます。それが大学入試の問題となるからです。しかし、そのような考え方をしているのは、欧米の大学でエッセイが出されても、ほとんど評価されないと知りました。与えられる問題に対し、どのような視点で、どのような次元で考えていかなければいけないかという方法を、松本先生の授業で学ぶことができました。たとえば、人とは違うような意見であっても、それをサポートする理由が論理的に考えることができれば、それが自分の主張になります。こういった考え方のスキルは、大学の

レポートを書くときだけではなく、時事的な社会問題などに対して自分なりの意見を持つていく上で、たいへん役立っています。

5段落エッセイを学ぶ効果は、書き方、考え方のスキルアップだけではありません。ある問題に対して自分なりの意見を考え、それを論理的に組み立てて、自らの口で発表していくというプレゼンテーション能力も養われます。この書き方、考え方の方法を駆使して就職活動の面接でプレゼンテーションをし、大手企業と呼ばれるところへ内定をもらった何人も先輩方の話を、私はよく聞かされています。

以上挙げたように、5段落エッセイの方法を身につけることで、まさしく留学先で求められる「Academic Skills」を獲得することができます。私は留学するつもりだったのでたまたまこの授業を取ったのですが、大学1年生の時からこの授業を取っていたら、間違いなく私の大学生活が変わっていたことでしょう。

留学に向けて

いま私は、9月に控える留学に向けてビザや保険などの手続きを行っています。出発の日が一日一日と近づくごとに、留学への不安や期待が押し寄せてきます。しかし、松本先生のクラスで鬼のようにしごかれたことをちょっと振り返ると、私でもできそうだとちょっと自信が持てます。先生と面談しているときに、たまたま先生が海外子女教育に関わっていたこともあって、私の専攻である Bilingualism についての研究テーマが少しずつ見えてきた気がします。

「Academic Skills for Study Abroad」は5年間続いている授業で、すでに大学を卒業した方、留学を終えられた方々がたくさんいらっしゃいます。卒業生は今でも松本先生を慕っていらっしゃる様子で、授業に出ていただいたり、飲み会に参加していただいたりしています。私にとって、このクラスを通じてできた卒業生や同級生のつながりはかけがえのないものです。留学している間もその後も、このつながりが私にとって大きな助けになると信じています。

さて、がんばるぞ！

(2007年6月30日)



カンジス川でボート遊び！ 行動的で好奇心一杯の新人、清沢君の登場です。留学前の準備と気持ちをレポートしてくれました。

早稲田大学の私のクラスの受講生です。多くのものを学んでいます。この後、夏の集中授業を受けてから、オレゴンに向けて出発します。

彼とじっくり話す機会がありました。このレポートにもあるようにバイリンガル教育を研究テーマに選ぶだけではなく、海外子女の日常生活・学校生活や言語習得などについて、深い興味を持っています。

海外子女の生活への、清沢君の目から見た感想や観察のレポートから新しい海外子女像が見えてくるのか？ 楽しみです。